

9 しんかいさんしゃじんじゃひがしほんしゃ 新海三社神社 東本社



指 定 国重要文化財 昭和12年 7 月29日
所在地 田 口
所有者 新海三社神社

旧田口村誌によると「佐久郡総社新海大神は、諏訪大神の御子にして、諏訪神系興波岐命ありて本郡草創の神なり」とある。

新海三社神社は、主神興波岐命を東本社に祀り、建御名方命を祀る中本社と、事代主命、誉田別命を祀る西本社とがある。

東本社は、現在の本地堂跡へ移される前は、親宮または大家社と呼ばれていた。

老杉古櫓に囲まれて鎮座する三社のうち、東本社は昭和12年（1937）7月国宝の指定を受け、その後、法改正により国の重要文化財になっている。

国宝に指定された際における調査の概要は次のとおりである。

社殿の沿革は不詳であるが、形式手法からみて室町時代（1392～1493）の建築である。部分的には江戸時代補修のあとを残しているが、全体的に当初の形式がよく保存されて東信地方における貴重な遺構である。建築上の特徴としては、優美であり温雅な感じのする一間社流れ造り、屋根は桧皮葺、箱棟は鬼板をつけ置千木、勝男木をおく、回縁のほか浜床にも高欄をめぐらし前に木階（階段）を設け、正面は方立幣軸の板戸である、向拝の木鼻は端正な形をしているが完全な象形ではなく、母屋頭貫の左右に出た木鼻は笹の葉の薄肉彫りがある。向拝柱の上の組物は三斗で中央に蓑束をたて母屋と海老虹梁でつないでいる。

新海三社神社は古来佐久三庄三十六郷の総社といわれ、広大な社地を有しており、旧境内（維新の折、士族に払渡された土地）の古墳から蕨手刀の出土もあり、また武神としても崇敬あつく、源頼朝による社殿の修理再興の口碑、武田信玄が箕輪城攻めの際における戦勝祈願の願文も残されている。